「西郷隆盛 ～ラストサムライの生真面目な生涯」

黒田裕樹（ブログ「黒田裕樹の歴史講座」）

1. 若き日の西郷の栄光と挫折

皆さんは、明治維新の実現に大きく貢献したとされる「維新の三傑」についてご存知でしょうか。桂小五郎(かつらこごろう、後の木戸孝允＝きどたかよし)に大久保利通(おおくぼとしみち)、そして西郷隆盛(さいごうたかもり)のことですが、この3人のうち今も昔も人気が高いのは、やはり「西郷さん」「南洲(なんしゅう)先生」などと呼ばれ、人々の尊敬を集める西郷隆盛ではないでしょうか。

西郷隆盛は様々な苦難の末に討幕を果たして、明治新政府の重鎮としても多くの業績を残しましたが、やがて征韓論争に敗れて下野(げや)すると、西南の役（えき、別名を「西南戦争」）を起こして、城山(しろやま)の露(つゆ)と消えるという非業(ひごう)の最期を遂げました。

我が国の長い歴史の流れの中で、彼は私たちに何を残したのでしょうか。また、私たちは彼から何を学ぶべきなのでしょうか。

今回の講座では、西郷隆盛の生真面目(きまじめ)な生涯をたどりながら、幕末から明治にかけての数々のエピソードなどについて分かりやすく紹介していきたいと思います。

西郷隆盛は文政(ぶんせい)10年旧暦2月7日（現在の太陽暦では1828年1月23日、以後明治5年＝1872年までは基本的に旧暦を使用します）に、薩摩藩(さつまはん)鹿児島城下の下加治屋町(したかじやまち、現在の鹿児島市加治屋町＝かごしましかじやちょう)で、西郷吉兵衛(きちべえ)とマサ夫婦の長男として生を受け、幼名を小吉(こきち)と名づけられました。

西郷家は御小姓組(おこしょうぐみ)として勘定方小頭(かんじょうがたこがしら)を務めていましたが、当時はすっかり零落(れいらく)しており、幼年期の西郷も貧しい中で過ごしましたが、そんな彼を育(はぐく)んだのが「郷中教育(ごじゅうきょういく)」でした。

郷中教育は、先輩が後輩を直接指導するという「自主教育」が大きな特徴であり、藩士たちは6～7歳からの小稚児(こちご)、11歳～14歳くらいまでの長稚児(おさちご)、14～15歳から24～25歳の二才(にせ)に分けられ、小稚児の指導を二才と長稚児が、長稚児の指導を二才が行っていました。

郷中教育の目的は武道の修練や忠孝の実践などであり、「ウソを言うな」「負けるな」「弱い者いじめをするな」といった精神を徹底的に鍛(きた)えられましたが、西郷は20歳の頃には郷中で二才頭(にせがしら)に選ばれるなど優秀であり、年少者の模範(もはん)となるように厳しく自分を律しなが

ら、誠意をもって後輩を指導したそうです。

なお、郷中とは数十戸(すうじゅっこ)を単位とした武士の居住地区である方限(ほうぎり)内に設けられた青少年の自治組織のことですが、下加治屋町からは西郷のほかに弟の西郷従道(さいごうつぐみち)や大久保利通、村田新八(むらたしんぱち)や大山巌(おおやまいわお)、あるいは東郷平八郎(とうごうへいはちろう)など、幕末や明治に活躍する人材が多く世に出ました。こうした事実から、薩摩藩独自の郷中教育の影響の大きさを、私たちはうかがい知ることができます。

さて、西郷は 14 歳の天保(てんぽう)12（1841）年に元服して吉之介(きちのすけ、一般には「吉之助」の方が知られています)を名乗り、18 歳には藩の郡方書役助(こおりかたかきやくたすけ)に任じられましたが、そこで西郷が見たものは、貧しい農民の姿と賄賂(わいろ)や汚職にまみれた役人の実態でした。

そんな西郷を支えたのが、上司の迫田太次右衛門(さこだたじえもん)でした。他の武士と違って賄賂を一切受け取らず、農民の暮らしに思いをはせた迫田は、西郷に以下の自作の歌を残しました。

「虫よ　虫よ　五ふし草の根を絶つな　絶たば　おのれも共に枯れなん」

「五ふし草」は稲や民のことで、虫は汚職役人を意味しており、根っこまで食べつくせば結局自分たち武士も死んでしまうぞ、という警告の歌であるとともに「農民と武士は運命共同体である」という秘められた思いが、西郷の心に強く響きました。

西郷は迫田の精神を心に深くとどめ、やがて自らの政治理念の一つとしていくのですが、そんな彼に運命の出会いが訪れます。薩摩藩主である島津斉彬(しまづなりあきら)による抜擢(ばってき)でした。

嘉永(かえい)4（1851）年に薩摩藩主となった島津斉彬は、我が国の開国を受けて、それ以前に調所広郷(ずしょひろさと)の改革によって回復した藩の財政を、惜しみなく富国強兵に活用しました。

欧米列強に対抗するためには、鉄製の様々な武器などを必要としましたが、当時の我が国の製鉄技術は、西欧のそれと比べて遅れていました。このため、西欧風の製鉄を行うために反射炉(はんしゃろ)の建設が急がれたのですが、斉彬はいち早く本拠地の鹿児島に反射炉を築造しました。

斉彬は他にも造船所やガラス製造所を次々と建設し、また砲術などの洋式の軍事訓練を行って、軍事力の強化にも努めました。ちなみに、我が国の国旗である「日の丸」は、幕末に諸外国との条約を結んだことで、外国船と区別するための標識として考案されたものでもありますが、その際に日の丸を提案したひとりとして、斉彬の名が伝えられています。

斉彬は身分に関係なく有能な人材を登用しましたが、その中のひとりに西郷がいました。西郷の優秀さを愛した斉彬は、彼を江戸屋敷の秘書役たる庭方役(にわかたやく)に任命して諸藩への使いとし、水戸藩の藤田東湖(ふじたとうこ)や福井藩の橋本左内(はしもとさない)などに面会することで、尊王攘夷(そんのうじょうい)などの彼らの思想に大いに共鳴するようになりました。

しかし、そんな西郷に悲劇が訪れました。安政(あんせい)5（1858）年 7 月に、藩主の斉彬が急死してしまったのです。

斉彬の訃報(ふほう)に接した西郷は大きなショックを受け、生きていても仕方がないと殉死しようとしましたが、清水寺成就院(きよみずでらじょうじゅいん)の住職であった僧の月照(げっしょう)から諌(いさ)められました。

「このまま殉死しても斉彬公は決してお喜びにはなるまい。生き抜いて斉彬公の志(こころざし)を継いで働くことこそが、真の供養になるのではないか」。

月照の説得を受けいれた西郷でしたが、当時の江戸幕府は井伊直弼(いいなおすけ)が大老となって、自分の方針に反対する大名や公家(くげ)の多くを謹慎処分にしたほか、幕府に批判的な意見を持つ一般の志士たちを一斉に捕縛(ほばく)し始めていました。世にいう「安政の大獄(たいごく)」です。

安政の大獄によって、薩摩藩と朝廷との橋渡し役を務めていた月照の身にも危険が及ぶようになりました。西郷は薩摩に帰国して月照を何とか庇護(ひご)しようとしましたが、当時の薩摩藩は藩主の地位を継いだ島津忠義(しまづただよし)の父であり、斉彬の異母弟でもあった島津久光(しまづひさみつ)が藩政の実権を握ったことで、保守的な行動をとるようになっていました。

月照を匿(かくま)うことで幕府に睨(にら)まれることを恐れた薩摩藩は、西郷に対して月照を国外に追放するように命じました。万策尽きた西郷は、安政 5（1858）年 11 月 16 日に、月照と二人して鹿児島の冷たい錦江湾(きんこうわん)の海に入水(じゅすい)自殺を図ったのです。

西郷と月照の二人は入水した後すぐに引き上げられましたが、西郷は間もなく蘇生(そせい)したものの、月照はそのまま息を引き取りました。自分だけが生き恥をさらした西郷は、以後は自己のことを「土中(どちゅう)の死骨(しこつ)」と称しました。

つまり「自分はもう死んだ人間である」とし、人間が持つ利己心(りこしん)の一切を捨て去ってしまったのです。そして彼は、自己の葛藤(かっとう)と苦しみ抜いた後に「もう一つの考え」を持つに至りました。

「自分一人だけが生き残ったのは、まだ自分にはやり残した使命があるからではないか。いずれ自分の使命が終われば、天は自分の命を奪い去るであろうが、天が自分を生かしてくれる間は、自分にはまだやらなければならないことがあるということなのだ」。

こうした西郷の心境が、やがて「天を敬い、人を愛する」という「敬天愛人(けいてんあいじん)」の精神へとつながり、この後いかなる艱難辛苦(かんなんしんく)や恥辱(ちじょく)を彼が味わおうとも、自ら生命を絶つこともなく、黙って「天命を受けいれ、それに従う」という精神の境地に達したと考えられています。

2. 不遇の時代を乗り越えて討幕へ

さて、入水自殺を図った西郷は奄美大島(あまみおおしま)に流されました。後に鹿児島への帰参が許された西郷は、藩の実権を握った久光とはそりが合わず、今度は徳之島(とくのしま)から沖永良部島(おきのえらぶじま)へ流されるなど不遇の時代を過ごしましたが、彼は敢えて生き恥をさらしながら自分の運命を受けいれました。

一方、西郷の親友であった大久保利通は久光に取り入り、側近として重用されましたが、決して久光の保守的な考えに賛同したわけではありませんでした。いずれ時代が西郷を必要とするようになると先を読み、あえて猫をかぶっていたのです。

やがて利通の読みは当たり、文久(ぶんきゅう)2（1862）年に起きた、久光の行列をイギリス人が馬で横切ったことから殺傷されたという生麦(なまむぎ)事件の悲劇の後、翌文久 3（1863）年に薩摩藩がイギリスと衝突して薩英戦争(さつえいせんそう)が起きると、このような非常事態に対応できるのは人望が篤(あつ)い彼しかいないということで、ついに西郷が呼び戻される日がやってきました。

まさに天命。島流しの苦労に耐え、人間としてより磨(みが)きのかかった西郷に天は歴史の表舞台を用意し、その期待に応えるかのように、以後の西郷は獅子奮迅(ししふんじん)の働きを見せるようになるのです。

復帰が許された西郷は、元治(げんじ)元（1864）年に禁門(きんもん)の変の指揮をとり、前年の文久 3（1863）年の八月十八日の政変で御所を追われた後に、失地回復を図って京都に押し寄せた長州藩(ちょうしゅうはん)を打ち破りました。この事変は別名を「蛤御門(はまぐりごもん)の変」とも呼ばれています。

禁門の変によって面目を取り戻した江戸幕府は、長州藩に追い打ちをかけるべく、諸藩を動員して討伐の軍を起こしました。これを第一次長州征伐といいます。

当時の長州藩はイギリス・アメリカ・フランス・オランダの 4 ヵ国が下関を砲撃して占領するという四国艦隊下関砲撃事件が起きるなど、まさに満身創痍(まんしんそうい)でした。

こうした状況を考えれば、幕府の征伐によって長州藩に致命的な打撃を与えることも十分に可能でしたが、四国艦隊下関砲撃事件も加わっての長州藩の弱体化がいずれは「日本国」への侵略につながると判断した西郷にとって、それは好ましいことではありませんでした。

西郷は自ら敵地の岩国に出向いて説得し、一戦も交えることなく長州征伐を片付けることに成功しましたが、幕府が長州征伐にこだわり続ける姿勢を見せると、やがて西郷は幕府を見限り、敵対していた長州藩と手を結ぶ道を模索(もさく)し始めたのです。

慶応(けいおう)2（1866）年１月、土佐藩の坂本龍馬(さかもとりょうま)や中岡慎太郎(なかおかしんたろう)の斡旋(あっせん、間に入って両者をうまく取り持つこと)によって西郷と桂小五郎とが会談し、薩摩藩と長州藩は極

秘に同盟を結びました。これを薩長同盟、または「薩長連合」といいます。

そんな薩長の動きを知らない幕府は、同年6月に第二次長州征伐を実行しましたが、薩摩藩が出兵を拒否するなど諸藩の集まりは悪く、幕府の士気もふるわなかったことから不利な戦況となり、大坂城へ出陣していた14代将軍の徳川家茂(とくがわいえもち)が7月に21歳の若さで急死すると、それを口実に戦闘を中止しました。

第二次長州征伐の失敗は、武力で他藩を支配することで成り立っていた幕藩体制の崩壊を意味しており、幕府の威信は文字どおり地に堕(お)ちてしまいましたが、そんな幕府に追い打ちをかけるように、年末に大きな不幸が起きてしまいました。

孝明(こうめい)天皇が、37歳の若さで崩御(ほうぎょ)されてしまわれたのです。孝明天皇は攘夷のお考えが強かったものの、討幕を好まれずに公武合体のお立場であっただけに、幕府にとっては大きな痛手となってしまったのでした。

なお、孝明天皇の皇子で、まだお若かった明治天皇が即位されたほか、幕府の 15 代将軍として、一橋家(ひとつばしけ)で水戸藩出身の徳川慶喜(とくがわよしのぶ)が就任しました。

徳川慶喜は、フランス式の軍制改革を行うなど幕政の立て直しに努めましたが、討幕への流れはどうすることもできず、慶応3（1867）年10月14日、朝廷は薩長両藩に対して討幕の密勅(みっちょく、秘密に出された天皇による命令のこと)を下しました。

しかし、こうした事態を予想していた慶喜が、先手を打つ形で同じ10月14日に朝廷に対して大政奉還を行い、政権を朝廷に返上しました。

幕府による大政奉還は、薩長らの討幕の密勅がその根拠を失っただけでなく、徳川家が来るべき新政権の中心的な存在として政治の実権を握り続けるという可能性も秘めていました。

しかし、そんなことを許しては、苦労して討幕運動を続けてきた意味がないと憤(いきどお)った西郷らの薩長両藩や、公家の岩倉具視(いわくらともみ)らの討幕派は、同年12月9日に武力を背景に朝廷内で政変を実行しました。これを王政復古の大号令といいます。

王政復古の大号令が発せられた12月9日の夜、小御所(こごしょ)会議が明治天皇ご臨席のもとで開かれました。旧幕府側の前土佐藩主の山内容堂(やまうちようどう)らは、この会議に前将軍の徳川慶喜が出席できないことを抗議しましたが、岩倉具視らが受けいれないなど話し合いは紛糾(ふんきゅう、意見や主張などが対立してもつれること)し、やがて休憩に入りました。

休憩時、岩倉は外で警備をしていた西郷に意見を求めると、西郷は「短刀一本あれば用は足りる」と答えたそうです。つまり、相手と差し違えるだけの覚悟をもてば道は開けると岩倉を勇気づけたのでした。

西郷の発言がやがて山内容堂の耳にまで届くと、土佐藩に傷をつけてまで幕府に肩入れすることはないと判断した山内はその後沈黙し、休憩後はほぼ岩倉らの思いどおりに会議は進みました。結局慶喜は将軍のみならず、内大臣の辞任と領地を一部返上させられることで決着しました。

しかし、長年我が国の政治を引っ張ってきた幕府が巻き返しを図り、小御所会議の内容が骨抜きにされ、慶喜の実権が温存されようとしたため、西郷は最後の手段として、江戸の商家を薩摩藩という身分を隠さずに片っ端(ぱし)から襲って幕府を挑発し、慶喜の名誉が回復する前に戊辰(ぼしん)戦争を起こさせることに成功しました。

西郷による、なりふり構わぬ策士ぶりが大きな歴史の流れを動かしたことになります。なお、この当時江戸市内の警備をしており、江戸の薩摩藩邸を焼討ちして戊辰戦争のきっかけをつくったのが、酒井家(さかいけ)の庄内藩(しょうないはん)だったことが、後の西郷自身と庄内藩との運命を大きく変えることにつながりました。

3. 西郷の武士道精神を支えたもの

明治元（1868）年１月３日、慶喜率いる旧幕府軍は、薩長を中心とする官軍となった討幕軍と京都の鳥羽・伏見で激突しました。これを鳥羽・伏見の戦いといいます。戦いは官軍の圧勝に終わり、朝敵となった慶喜は江戸城に入りましたが、勢いに乗る官軍は、慶喜への征討軍を編成して江戸へ向かわせました。

征討軍が駿府(すんぷ、現在の静岡)にまで迫ってくると、旧幕臣の勝海舟(かつかいしゅう)は早期の停戦と江戸城の開城を慶喜に進言し、交渉を委任されました。

江戸を動くことが出来ない勝は、山岡鉄舟(やまおかてっしゅう)を使者として駿府へ向かわせ、同年 3 月 9 日に東征大総督府参謀(とうせいだいそうとくふさんぼう)となっていた西郷と会見させました。

山岡は勝の手紙を西郷へ渡して朝廷に取り計らうよう依頼しましたが、西郷は山岡に対して複数の条件を突き付けました。

西郷の条件は江戸城の引き渡しや旧幕府軍の武装解除などであり、山岡はそれらの要求を大筋で受けいれたものの、一つだけは断固として拒否しました。

その要求とは「徳川慶喜の身柄(みがら)を備前藩(びぜんはん)に預けること」でした。勝と同じく旧幕臣の山岡鉄舟にとって、自らの主君が流罪(るざい)になってしまうことだけは、他の旧幕臣をなだめるためにも絶対に受けいれられなかったのです。

山岡が「慶喜の備前藩お預け」を拒否すると、西郷も「これは朝命(ちょうめい、朝廷の命令＝天皇の命令のこと)である」と一歩も引きませんでした。二人の話し合いは平行線をたどり、もはや決裂かと思われたその時、山岡が西郷に迫りました。

「西郷さん、もしあなたと私の立場が逆になって、島津侯(しまづこう、島津の殿様のこと)を他藩に預けろと言われれば、あなたはその条件を受けいれるつもりですか！」

山岡の決死の意見に対し、さすがの西郷も言葉が詰まりました。やがて山岡の論理をもっともだと思った西郷は折れ、慶喜の件を自分に一任することで話し合いは決着しました。

山岡は翌3月10日に江戸に戻って勝に結果を報告すると、西郷も13日に江戸の薩摩藩の屋敷に入りましたが、征討軍の江戸城進撃の予定日は15日に迫っており、予断を許さない中で西郷隆盛と勝海舟との会見が行われたのです。

西郷と勝との話し合いは、3月13日から14日にかけて江戸の薩摩藩屋敷で行われました。その結果、旧幕府は江戸城を無傷で明け渡し、慶喜は故郷の水戸で自主的に謹慎するという、極めて平和的な内容で決着し、西郷は翌15日に行う予定であった江戸城への攻撃を中止しました。

この後4月に江戸城は争うことなく開城となり、戦いで多くの血が流されることを回避できたほか、江戸を焼け野原から防いだことは、後の首都移転など大きな効果をもたらすことになりました。

江戸城の無血開城の立役者は西郷や勝海舟であると一般的には言われていますが、その西郷と事前に命がけで交渉を行った山岡鉄舟の功績も見逃せません。現実に、西郷は山岡に対して以下のような賛辞を贈っています。

「金もいらぬ、名誉もいらぬ、命もいらぬ人は始末に困るが、そのような人物でなければ天下の偉業は成し遂げられないものだ」。

江戸城の無血開城によって大規模な戦乱は回避されたものの、戦わずして降伏することを嫌った旧幕臣を中心とする抗戦派は、奥羽越(おうううえつ)列藩同盟を結成していた東北諸藩を中心に各地で戦闘を続けましたが、ここで大きく明暗が別れることになりました。

かつて幕府のもとで京都守護職を務めた会津藩(あいづはん)に対して、長州藩が当時の恨みを晴らすべく攻め込んだのです。後に会津戦争と呼ばれた戦いにおいて、会津藩は徹底的に攻撃を受け、多くの血を流した末に降伏しました。

一方、江戸市中の警備を担当した際に、薩摩藩邸を焼討ちした庄内藩も果敢に戦い続けましたが、会津藩の降伏を知ると抵抗をあきらめました。厳しい処分が下ることを見越した庄内藩は、藩主や重臣が白装束(しろしょうぞく)に身を包んで切腹を覚悟していましたが、降伏式に臨んだ西郷は、その様子を見て真っ先に叫びました。

「切腹して詫(わ)びるなど、とんでもないことだ！」

西郷は藩主や重臣の切腹を認めなかったどころか、庄内藩が差し出した武器一切の目録も「貴藩には北方の守りをしてもらわねばならないのだから、武器はそのままお持ちください」と返してしま

いました。

また城明け渡しの儀式に際しては「敵味方に分かれるのは運命であり、一旦(いったん)帰順したからには兄弟も同じである」と官軍を丸腰で入場させる一方で、庄内藩士には帯刀(たいとう)を許しました。庄内藩の処分も藩主酒井忠篤(さかいただずみ)に謹慎を命じただけの軽いものであり、その寛大すぎる処置に、官軍内部から不満の声が上がりましたが、西郷は以下のように答えてそれらを一蹴(いっしゅう)しました。

「武士が一旦兜(かぶと)を脱いで降伏した以上、武士の一言(いちごん)を信じるのが武士というものである。もし反逆すれば、また討てばよい」。

それにしても、長州藩の厳しい処置に比べて、なぜ西郷はここまで寛大であったのでしょうか。その背景には、西郷が自然と身に着けていた武士道精神に基づく兵法がありました。

その精神をまとめたものを「闘戦経(とうせんきょう)」といいます。

古来の兵法書として有名なものに「孫子(そんし)」があり、我が国の兵学に大きな影響を与え続けてきました。しかし、中国由来の「孫子」は「兵は詭道(きどう)なり」などといった「相手を騙(だま)して自己を有利に導く」考えが基本であり、我が国のように、相手に対する思いやりといった「和の精神」を重視する流れとは本質的に合わないものでした。

そこで、今から約 900 年前に大江家(おおえけ)があらわした兵法書が、日本人本来の精神的な崇高(すうこう)さや美徳を重視した闘戦経であり、武士道精神を守るとともに、孫子ばかりに頼って国を誤ることのない様にと伝えられたものとされています。

なお、孫子と闘戦経とを表裏(ひょうり)で学んだ天才的な武人としては、あらゆる戦術を完璧にこなして、類稀(たぐいまれ)なる立派な戦例を残しながら、最期には君命に従って湊川(みなとがわ)で壮絶な戦死を遂げた、楠木正成(くすのきまさしげ)の名が挙げられます。

鑑(かんが)みれば、西郷隆盛のこれまでの姿勢は、時として幕府を挑発して戊辰戦争を起こさせるなど「孫子の兵法」が見られる一方で、山岡鉄舟の説得を受けいれたり、自ら降伏した庄内藩に寛大な処置を行ったりと「武士道精神」の神髄(しんずい)が見受けられるのも、西郷自身が闘戦経の体現者である証拠だとはいえないでしょうか。

なお、闘戦経に基づく武士道精神は、その後の彼の人生に幾度も垣間見(かいまみ)えるようになります。

4. 征韓論争にも見られた「武士道精神」

戊辰戦争が終わって大きな反乱がひと段落すると、西郷は故郷の鹿児島へ戻って薩摩藩の藩政改革を行うなどしましたが、大久保からの度重(たびかさ)なる要求に応えるかたちで、明治 4（1871）年

に明治新政府に出仕し、参議となりました。

西郷は大久保や木戸孝允らと協力して、懸案だった廃藩置県を断行しました。廃藩置県によって各藩主が持っていた領地への支配権が没収されるとともに、多くの士族が失業するという荒療治(あらりょうじ)でしたが、西郷は薩摩・長州・土佐から約 1 万人の御親兵(ごしんぺい、政府直属の軍隊のこと)を集めて軍事力を固めたうえで、これをわずか一日で実現してしまったのです。

通常ならば激しい軍事的抵抗があってもおかしくなかったはずでしたが、廃藩置県は目立った混乱もなく平和的に実現し、政府による中央集権体制が名実ともに整うことになりましたが、こうした劇的な効果をもたらしたのは、約 1 万人の御親兵という抑止力もあったでしょうが、指揮をとった西郷の人柄に周囲が納得した、という心理的影響も大きかったのではないでしょうか。

廃藩置県の実施後、大久保や木戸、岩倉らは条約改正を目指して欧米へ向かいましたが、我が国に残った西郷らは「留守政府」として、身分に関係なく満 20 歳に達した成年男子全員が 3 年間の兵役義務を負うという徴兵令のほか、学制の発布や太陽暦の採用、国立銀行条例の公布、キリスト教の解禁、地租改正など次々と改革を実行しました。

後に福沢諭吉(ふくざわゆきち)が「西郷の施政(しせい)の間は、言論も自由で一揆(いっき)や反政府運動も減っていた」と高く評価した留守政府の政策ぶりでしたが、外交問題が発生したことで、西郷は洋行(ようこう)した大久保らと激しく対立することになってしまうのです。

当時の我が国は、江戸幕府が押し付けられた不平等条約の改正とともに、欧米列強からの侵略や植民地化をいかにして防ぐかということも重要な外交問題でしたが、そんな我が国の安全保障のカギを握っていたのが朝鮮半島でした。

そこで、明治政府は当時の李氏(りし)朝鮮に近代化を進めるように働きかけました。朝鮮半島が開国して近代化し、確固たる独立国が誕生すれば、朝鮮の人々のためになると同時に我が国の安全度も増すと判断したからです。

政府は早速、当時の朝鮮国王である高宗(こうそう)に対して外交文書を送ったのですが、国王は文書の受け取りを拒否しました。なぜなら、文書の中に「皇」や「勅(ちょく)」の文字が含まれていたからです。当時の朝鮮は中国の清(しん)の属国であり、中国の皇帝のみが使用できる「皇」や「勅」の字を我が国が使うことで「日本が朝鮮を清と同様に支配下に置こうとしている」と判断したのでした。

もちろん、我が国にそんな意図はありません。我が国が天皇中心の新たな中央集権国家に生まれ変わったという意味で、形式的に「皇」や「勅」の字を使用したに過ぎなかったのです。我が国は朝鮮に対して理解を求め、新たに「皇」や「勅」の字を使用しない外交文書を送るなど懸命の努力を重ねましたが、態度を硬化させた朝鮮は首を縦に振りませんでした。

このように朝鮮が排他的な外交態度を示していた当時、我が国では先述のとおり政府首脳が海外へ視察中でしたが、やがて留守政府の中から「我が国が武力を行使してでも朝鮮を開国させるべきだ」

という意見が出始めました。

こうして政府内で高まった征韓論ですが、その中心的な存在となったのが西郷隆盛でした。しかし西郷はいきなり朝鮮に派兵するよりも、まずは自身が朝鮮半島に出かけて直接交渉すべきであると考えていました。その意味では、征韓論というよりも「遣韓論(けんかんろん)」といったほうが正しいかもしれません。

もっとも、西郷のような政府の重鎮が国交のない国に出かけ、もし万が一のことがあれば、そのまま朝鮮と戦争状態となってしまうのは明らかでした。

留守政府は西郷の朝鮮への派遣を一度は閣議で内定したのですが、一報を聞いてあわてて帰国した使節団の岩倉具視や大久保利通、木戸孝允らが猛反対しました。

西洋の発展を直接目にしたいわゆる「外遊組」にとっては、富国強兵や殖産興業を一刻も早く行い、列強からの侵略を受けないようにすることこそが最重要課題であり、朝鮮半島に深く関わりを持つ時間的あるいは経済的余裕はないという立場でした。

一方、西洋を「見なかった」西郷らの留守政府には、外遊組の意図が理解できませんでしたし、彼らには朝鮮との外交問題を通じて、それまでに活躍の場をなくしていた士族を救済したいという思惑もあったのです。

征韓論は政府を二分する大論争となった末、太政大臣代理となった岩倉によって、先の閣議による決定が覆(くつがえ)されました。自身の朝鮮派遣を否定された西郷は政府を辞職し、同じく征韓論を唱えていた板垣退助(いたがきたいすけ)や江藤新平(えとうしんぺい)らもそろって下野しました。これらの外交問題は明治6（1873）年に発生したので、一般的に「明治六年の政変」と呼ばれています。

こうしたいわゆる「征韓論争」は、西郷らが一方的に引き下がることで一応の決着を見ましたが、西郷ほどの実力者であれば、政府内部でクーデターを起こして政権を乗っ取り、実力で自己の政策を押し切ることも十分可能でした。

しかし、西郷には権力を私物化するのみならず、国益をないがしろにするような行為をなす考えは毛頭(もうとう)ありませんでした。このあたりにも、武士道精神を重んじる「闘戦経」の考えを垣間見ることができます。

なお、西郷が下野して政府を去ったのを何よりも惜しまれたのが、明治天皇でいらっしゃいました。西郷は政府に出仕してすぐに宮中(きゅうちゅう)の大改革に乗り出し、天皇ご自身に君主として相応(ふさわ)しい力量をお持ちになってほしいという願いを込めるとともに、まだお若かった明治天皇を全力で支え続けました。

西郷の改革によって、それまで天皇のそばには多くの女官(にょかん)が身の回りの世話をしていたのを退け、山岡鉄舟など質実剛健(しつじつごうけん、飾り気がなくまじめでたくましくしっかりしていること)な旧武士た

ちが、明治天皇に直接仕えるようになりました。

明治天皇はご身辺の大変化に見事に順応され、毎日のように乗馬を楽しまれるなど、たくましく成長されたそうです。また西郷は、明治天皇が陸軍の演習や地方へのご巡幸(じゅんこう、天皇が各地をまわられること)にお出かけになられた際に、天皇のそばにずっと付き従いました。

陸軍の演習が行われた後、夜になると天皇は他の兵士たちと同じようにテントで野営(やえい)されましたが、生憎(あいにく)の荒天(こうてん)でテントから雨水が漏(も)れるということがありました。

しかし、「戦場の兵士たちが現地でどのような境遇にあるのかを身を以って知っていただくことも必要である」と考えた西郷は、そのまま明治天皇にご休息いただき、自らは万が一のために寝ずの番をしていたそうです。

これらのように明治天皇への忠誠心が篤かった西郷でしたから、彼が下野して政府を去らねばならなかったときの陛下(へいか)のお気持ちは、拝察するに余りあります。

5. 西南の役に見られる西郷の「死生観」

さて、下野した西郷は、鹿児島に帰って晴耕雨読の日々を過ごしましたが、やがて鹿児島県下には、西郷が受けた仕打ちに義憤を感じた若者であふれるようになりました。

彼らを指導あるいは統制しなければ道を誤るかもしれないとの考えから、明治7（1874）年に鹿児島に私学校がつくられましたが、人材育成がその主目的だったはずが、いつしか西郷を中心とする私兵養成所の様相を呈(てい)するようになりました。

私学校の影響はいつしか県下の行政組織や警察網にまで及び、鹿児島県が政府に租税も納めなくなったことから、やがては鹿児島全体が独立国のように感じられ始めました。

時あたかも、明治 9（1876）年に廃刀令や秩禄(ちつろく)処分が出され、武士としての誇りや経済的な拠(よ)り所が政府によって失われたことをきっかけとして、九州を中心に士族の反乱が相次いで起きていました。

西郷の動きを警戒した政府は、大警視(だいけいし、現在の警視総監＝けいしそうかん)の川路利良(かわじとしよし)に命じて密偵団を組織して鹿児島に派遣し、彼らの動静を探ろうとしましたが、そんな折の明治10（1877）年1月下旬に、陸軍が鹿児島に貯蔵していた武器弾薬を運ぼうとしていたところ、血気盛んな私学校の生徒たちが襲撃して奪い去るという事件が発生してしまったのです。

私学校の生徒が暴発した際、西郷自身は狩猟中(しゅりょうちゅう)で全く知りませんでしたが、報告を聞いて「しもた！」と思わず叫びました。慌(あわ)てて鹿児島に帰った西郷は、集まった私学校の生徒たちに対して「おはんたちは何ということをしでかしたのか！」と激怒したと伝えられています。

西郷の怒りは、自身がもはや私学校の生徒たちの勢いを止められないという悲しみでもありました。事実、政府が放った密偵の一人が逮捕されて「西郷の刺殺(しさつ)計画」を自供したこともあって、決起以外に手段がないところまで追いつめられてしまったのです。

西郷は「おはんらにこの命預けもんそ」と決意を固め、ついに明治 10（1877）年 2 月に政府に反旗を翻(ひるがえ)しました。世にいう「西南の役」のはじまりです。ただし、西南の役自体はもちろん単純な「不平士族の反乱」だったのではなく、急進的な近代化にこだわるあまり、日本の伝統を粗末に扱おうとした当時の明治政府への日本精神からの異議申し立てという面も含まれていました（後に詳しく紹介します）。

ちなみに有名なハリウッド映画「ラストサムライ」は、このような面までアメリカが日本を研究し尽くしていることによって制作することができたともいえます。

さて、西南の役に際して西郷軍は鹿児島から陸路を使い、熊本城を落とそうと主力を次々と投入しましたが、これは本来の戦略からすれば疑問符をつけざるを得ないものでした。

なぜなら、本気で政府を倒そうと思えば、政府軍の援軍が到着する前に海路を利用して、本州へ攻め上った方がはるかに得策だからです。しかし、西郷軍はあくまで目の前の熊本城の攻略にこだわり続けました。

戦いは「雨は降る降る人馬は濡れる　越すに越されぬ田原坂(たばるざか)」と後に歌われた田原坂を中心に激しいものとなりましたが、西郷軍が時間を費(つい)やす間に政府軍に取り囲まれるという失態を犯し、いつしか形勢が逆転して追いつめられるようになりました。

なぜ西郷軍は熊本城攻略にこだわったのでしょうか。私たちはそこに「闘戦経」から浮かび上がる西郷の「死生観(しせいかん)」とその覚悟をうかがい知ることができるのです。

闘戦経の第十二章は以下のように書いてあります。

「死を説(と)き生を説いて、死と生とを弁(べん)ぜず。而(しこう)して死と生とを忘れて、死と生との地を説け」。

直訳すれば「死とは何かを説き、生とは何かを説こうとしても、死と生とはわかるものではない。むしろ、死と生とを忘れ、死すべき地と生きるべき地とを説け」となるこの言葉に託された真意はどこにあるのでしょうか。

人間は「死とは何か」「生とは何か」を抽象的あるいは思弁的(しべんてき、経験によらず思考や論理にのみ基づいていること)に考えても、なかなか真理に到達できるものではないが、生死の抽象的な思考を一旦脇に置いて、生死の問題から来る不安を去り、現実的に、あるいは具体的に自分がどこに活路を見出し、どこで死を決すべきかを常に平常心で考え、覚悟できている境地を磨くべきである。

西郷はそのような境地を得ていたのではないでしょうか。ただしこれも現在の私の理解でしかなく、西郷の偉大さにもっと触れようと試みるのであれば、さらなる深い理解が必要であると考えています。

ところで、西郷は決起した際に「おはんらにこの命預けもんそ」と言っていますね。この言葉、普通は逆ではないでしょうか。

もし西郷が政府軍との戦いに勝つ気があるのならば、指揮官としては「おはんらの命は俺が預かった」と言うべきところを、西郷の言葉は全く逆でした。つまり、西郷は決起の際にすでに我が身を投げ出す決意をしていたのです。

これを裏付ける話として、熊本城を結果として落とすことができなかった際、西郷は「熊本の鎮台兵(ちんだいへい)は立派に戦った。これならば、日本全国を挙げて兵にしても決して不可はない」とむしろ喜んだことが伝えられています。

要するに、西郷が激しく戦ったのは、出来たばかりの政府を自らの手で潰(つぶ)すためではなく、先述のように急進的な近代化にこだわるあまり、日本の伝統を粗末に扱おうとした明治政府への「日本精神からの異議申し立て」とともに、武士が築いた明治維新でありながら、その武士を葬り去らねばならなかった矛盾を一身に引き受けての、壮絶な「死出(しで)の旅路(たびじ)」だったのです。

これらの目的を達成するために生き長らえてきたと悟った西郷だからこそ果敢に戦い、そして最期の時を迎えようとしていました。

6. 身は城山の露と消えても

明治10（1877）年9月、傷だらけの西郷軍は鹿児島に戻って城山を占拠しましたが、同月24日に政府軍は総攻撃を仕掛けてきました。政府軍の集中砲火が雨のように飛び交う中、城山を降りて行った西郷でしたが、やがて足と腹に銃弾を受けると、傍(かたわ)らにいた別府晋介(べっぷしんすけ)に声をかけました。

「晋どん、もうこのへんでよか。俺の首をはねい」。

西郷は別府晋介の介錯(かいしゃく)を受け、波乱に満ちた51歳の生涯を終えました。

こうして西南の役は幕を閉じましたが、半年以上に及んだ長い戦いは、政府が組織した農民や町人上がりの徴兵であっても武人として立派に戦い、戦争のプロである武士に勝るという事実を、実戦を通じて確認できたことに大きな意義がありました。

政府軍に逆らったことで、自分が「賊軍」になろうとも、これほど陛下のお役に立てたことはないはずだったからこそ、西郷は「これで本望である」と思って自らの死を迎えたに違いありません。

自らの天命に忠実に生きて十分にその務めを果たし、死に臨んで一点の悔いもなく、さわやかな心境でいられる。これこそが、武士道精神がもたらす「死生観」ではないでしょうか。

なお、西郷の死と呼応(こおう)するかのように、同じ明治10（1877）年には木戸孝允が病死し、かつての西郷の盟友だった大久保利通も翌明治 11（1878）年に暗殺され、維新の三傑が相次いでこの世を去り、明治政府は新たな世代によって運営されることになりました。

さて、賊軍として死んでいった西郷でしたが、再び不平士族の反乱が起きることを恐れた政府によって名誉回復が遅れ、死後12年が経った明治22（1889）年、大日本帝国憲法（＝明治憲法）の発布による大赦(たいしゃ)によって、ようやく正三位(しょうさんみ)が追贈されました。

これを記念してつくられたのが、今も残る有名な上野の銅像でしたが、軍服姿では西南の役を想起させるという理由で、猟犬を連れての着流し姿が選ばれたほか、その場所も皇居付近から離れた上野に置かれることになりました。

また、西郷によって名誉を保つことができた庄内藩を通じて、西郷の教えが一冊の本にまとめられ、明治22（1889）年の西郷の名誉回復を機に「南洲翁遺訓(なんしゅうおういくん)」として発刊されました。これは「西郷南洲遺訓」として、現代でも入手が可能となっています。

なお「南洲」とは西郷が沖永良部島での文筆活動で使った名であり、「南の島」という意味ではないかと考えられています。

時代は下って、明治期の思想家であった内村鑑三(うちむらかんぞう)は、自著の「代表的日本人」を英語で書き、我が国の文化や思想を海外に紹介しようとした際、西郷隆盛を日本人の持つ高い倫理性と精神性を純粋に練り上げた「ラストサムライ」として最初に載せました。

内村の言葉を借りるまでもなく、西郷隆盛こそが武士道精神を貫き通した「最後のサムライ」であり、その生真面目すぎる生涯に、多くの日本人が今もなお尊敬の思いを高めています。

若い頃から様々な苦労や経験を積んできたことで、人望篤く信頼の高い大人物となり、自身の力で明治維新を成し遂げたにもかかわらず、そのことを驕(おご)るどころか、ひたすら無私の精神で生き抜き、最後にはすべての矛盾を一身に引き受け、賊軍として城山の露と消えた西郷隆盛。

彼の人生そのものが日本人の誇りであるとともに、彼の生き様に学ぶことこそが、我が国を立て直す大きな流れにつながるのではないでしょうか。（完）

主要参考文献：「西郷隆盛　命もいらず名もいらず」（著者：北康利　出版：ワック）
「闘戦経　武士道精神の原点を読み解く」（著者：家村和幸　出版：並木書房）
「日本の歴史５　明治篇」（著者：渡部昇一　出版：ワック）
「歴史街道　2006 年 12 月号」（出版：PHP 研究所）

YouTube 再生リスト「西郷隆盛」
https://www.youtube.com/playlist?list=PLeZrZWy-wML4-Xt-MjkuWtQok3-Sp3SEB

黒田裕樹の歴史講座
http://rocky96.blog10.fc2.com/